

運と実力のあわい

対談

鈴木大介

(将棋棋士)

近藤誠一

(プロ雀士)

実力の世界に身を置く棋士には、

運の入り込む余地があるゲームを好む者が多いという。

鈴木大介九段は麻雀好きで、2019年度の麻雀最強戦で優勝するほどの実力の持ち主だ。

将棋と麻雀。勝負勘の違いはどのように出るのか。

10年来の付き合いである麻雀の近藤誠一プロとの対談から、
運と実力の境界を探る。



鈴木 今、麻雀はいろいろなメディアに取り上げられていて、たとえばMリーグというかなり大きな大会はアベマで週四日生放送されていますが、近藤さんはそこでも活躍されています。人

気面を含めて、トッププレイヤー中のトップという存在です。そんな近藤さんが将棋を始めたきっかけはなんだつたんですか？

近藤 父が将棋が大好きで、たしか僕が小学校に入る前に教えてもらつたのが始まりですね。本もいろいろ読みました。

鈴木 以前、スカパー！の囲碁・将棋チャンネル『お好み将棋道場』にも出ていただきましたね。僕は解説役だったので、近藤さんは考えるのが得意な印象を受けました。やっぱりそこは考えるゲームという意味で麻雀と似ているのかと。いろいろなことを読んでいるんです。

棋士の麻雀は早打ちが多い？

近藤 鈴木さんとの飲みの席で雀士仲間数人が将棋をしてもらつたことがあって、みんな順番を待っているんですよ。だけど僕はどうしても長考になつて、ものすごく時間をかけてしまつた。

鈴木 飲み屋での練習将棋にしては、ふだんの

三倍ぐらい時間がかかった（笑）。雀士の方たちはけつこう考える方が多いんです。

逆に将棋指しの麻雀は早打ちが多い。将棋は読んでも読んでも読み切れないということが原点にあつて、読みを省くのが美德とされているんです。森内俊之九段などは麻雀やカードゲームでも初手はけつこう長考することがあるけど、始まると全部ノータイムで進めます。

近藤 将棋の魅力は、始めたばかりの段階からある程度、理詰めで進めていくて、自分の力量が上がっていくのがわかりやすいところでしょうかね。手合い（ハンド）もいろいろあって、段階を踏んで進んでいける楽しげがある。

鈴木 我々プロも右肩上がりに強くなれたら、それほど幸せなことはないんですけどね。プロには誰にも得意戦法があつて、それが通用しなくなるとまたゼロから作り直さなくちゃいけない。「作つては壊し、壊しては作つて」とよく言うん

ですけど、自分で言えばそういう節目の時が五六回あつたんです。今までの自分の将棋が通用しないくなるときがくる。

近藤 先ほど僕が言つた将棋の楽しさというのは、実は将棋のとくに、段階（レベル）の違いによる楽しさ、というところが大きいんです。

鈴木 特にトッププロは、相手にいろいろと研究されるでしょうからね。

鈴木 それは大きいでしょうね。おそらくプロのレベルはずつと右肩上がりで、今も上昇しています。特にAIが出てきてからとても上がつ